

地域の学年を越えた縦関係の実態 - 学童保育における異年齢集団の存在 -

岩崎 未来

北九州大学文学部人間関係学科

要旨

本論文では、社会環境の変化による子ども社会の喪失が叫ばれている現在、共働き・単身家庭の親によってつくられた学童保育を取り上げ、子ども集団がいかに形成されているのかを、異年齢集団の存在という視点から述べていった。

研究方法としては、北九州市八幡西区本城学童保育クラブで、指導員のお手伝いをしながら子どもたちのグループを記録し、観察データとインタビューの分析に基づいて論を進めた。

結果として、学童保育クラブでは同年齢集団よりも異年齢集団が多いことが分かった。しかし、集団形成では男女分離型が多く、学年が上がるに連れその傾向が強まっている。特に、男子には異年齢集団が多く、女子には同年齢集団が多く見られた。

また、関わり頻度の高い子ども同士には地域性は働いているが、むしろ多様な地域の子どもたちと遊ぶ学童保育では、地域性の影響はないと思われる。

さらに、グループ構成過程ではリーダー的・尊敬する存在・支配的などの力によるもの、子ども自身の友だちを選択する上での規準、きょうだいの影響又は環境といった要因が考えられる。

以上のことから、子どもにとって学童保育での子ども集団、異年齢集団の実態を明らかにしつつ、地域の異年齢集団の新しい在り方を考える。

目次

はじめに

第一章

第一節 学童保育とは

第二節 本状学童保育クラブ

第二章 本状学童保育クラブにおける

異年齢集団調査

2 - 1 集団形成における男女別人数と

集団の大きさ

2 - 2 異年齢集団と同年齢集団

2 - 3 集団形成と地域性

第三章 集団形成と人間関係、学童保育の事例から見えてくること

第四章 分析・考察

結論

はじめに

近年、わが国の急速な社会変化の影響で、特に、高度経済成長以降、地域の子どもの生活と集団が失われはじめたといわれてい

る。特に、共働き、単身家庭の増加、少子化、学歴社会、遊び場の減少などは、子どもをとりまく環境に大きな変化を与えたのである。

今日の子ども像を検討する場合、偏差値や受験戦争といった学歴社会をめぐる問題がしばしばとりあげられる。しかし、その背景にあるもっと基本的な問題として、子ども集団の喪失、仲間との人間的な交わりの希薄さ、自治意識のなさという事実を無視することはできない。

後者の観点から見た場合、子ども社会において、日常的・恒常的な異年齢集団は姿を消していることに気付く。この論文では、こうした子ども像をめぐる問題として、学童保育における異年齢集団のありかたに視点を向けた。

増山均は「子ども組織の教育学」のなかで、学校外教育の指導として、地域の子どもの仲間集団の自主的で自治的な生活・活動・組織の中で生み出される自己教育力の必要性を謳っている[増山；1991]。干田夏光は「現代の子ども像と子育てにおける弱点としての『子ども集団の喪失』『仲間との人間的な交わり（連帯・団結）の希薄さ』『自治体験のなさ』、すなわち 協同・連帯・集団観 の形成の問題」を強く指摘している[干田・『暴力非行』1979、汐文社]。また、あるPTAの役員は「昔と違い低学年から高学年までがいっしょになって遊ぶことは少なく、隣近所の子どもや兄弟など遊ぶ相手の範囲が狭い」と話してあったという[〔福井新聞、1983.6.29〕増山均著「子ども組織の教育学」より]。先行研究として[「子どもの仲間集団と地域社会」住田正樹著；九州大学出版会]の中

でも、子どもは社会的経験を通して当該社会の人間へと発達していくと述べられている。このような指摘からもわかるように、子供の成長・発達にとって最も重要なことは、子ども社会の存在であり、そこでの仲間との関わりである。

さらに、石川・野本は「現代子ども・若者考—自分さがしのジレンマー」の中で以下のように述べている。

戦前の日本の学校の中に創り出された学級制度は、子どもたちを同一年齢集団に輪切りにして、教師の指導の下に、受動的に活動する他律的な集団にし、大人によって指導される年齢別訓育集団としての性格を非常に強くあたえられることになった。こういう集団には、年長の子どもが年少の子供の面倒を見てやりながら、集団行動の中で自分たちの力を彫琢し、集団の文化的蓄積をダイナミックに伝承していくという力がまったくない。それでも子どもたちは、学校の外で、自治的な異年齢集団を守り続けてきた。しかし、社会の変化にともなって、放課後の時間も子どもたちは集まることができず、子ども組的な自治集団の活動時間は失われてしまったのである。[石川恵美子・野本三吉；1991]

一方、子ども社会の変化の原因となっている社会変動において、特に、共働き、単身家庭では、子どもの問題だけではなく、親の問題が大きい。共働き・単身家庭では、子どもが小学校、特に低学年の場合、放課後の生活の保障・安全性について新たな問

題が生じた。このような親の願いから生まれたのが学童保育である。

ここで、学童保育に着目した要因は二つある。一つは、異年齢集団が生活を送っているということである。学童保育では学校の教育や塾などと違って、異年齢の子どもたちによって構成され、かつて地域にあった子ども社会のありかたを受け継ぐ特性を持っている。二つめは、かつては、大人の力によって変えられた子どもをとりまく社会環境を、共働き・単身家庭の親が中心になって、再び復帰させようという運動が起きているという点である。

したがって、以上の二つの特徴をもつ学童保育を中心に、どのように集団が形成されているのか、また、異年齢集団が形成されるどのような性質を持っているのかを実際の観察事例やデータをもとに、論じていきたいと思う。

第1章

第1節 学童保育とは

まず、簡単に学童保育について説明しておきたい。戦後、働く母親が増えていく中で、共働き、母子・父子家庭の子どもたちは、小学校から帰った後の放課後や春・夏・冬休みなどの学校休業日には子どもたちだけで過ごすことになる。この子どもたちの放課後と学校休業日の生活を守るのが「学童保育」である。1948年大阪市の今川学園で学童保育が開始され、現在、全国に8000カ所を越える学童保育があるが、

その数は全小学校区の三分の一である。対象児童は主に小学校一年生から三年生であるが、それ以上のところもある。運営主体は市町村が主で、その他に、社会福祉協議会・社会福祉法人・父母会等民間団体又は民間委託など地域の実情に応じ多様な運営形態がある。そのため、設置場所は児童館内、学校の余裕教室、集会所、学校の敷地内及びその近隣にプレハブ小屋を建てるなど多種にわたり、指導員数とその身分、対象児童、保育時間、保護者の負担等も特に決められた規準はない。

名称も、自治体によって「留守家庭児童会(室)」「子どもクラブ」「学童保育クラブ」などさまざまで、国(厚生省)は、学童保育を必要とする子どものことを「放課後児童」、学童保育のことを「児童クラブ」と呼んでいる。厚生省は、かつて長い間「留守家庭児童対策は児童館でおこなう」と言っていたが、1991年度から「放課後児童対策事業」で、留守家庭児童対策を児童館から独立した事業として位置づけるようになった。さらに、1993年秋から学童保育(児童クラブ)を児童福祉法に位置づけることを検討しはじめ、1998年春ようやく法制化され今日に至っている。[全国学童保育連絡協議会; 1995「学童保育のハンドブック」一社]

また、学童保育へ通うことで、親たちも子どもがどこで何をしているのかを把握できるので安心して働くことができる。そのため、学童保育には親の働く権利と家族の

生活を守る役割もあるといえる。

第2節 本城学童保育クラブ

つづいて、本研究の調査対象である本城学童保育クラブについて紹介する。

本城学童保育クラブは北九州市八幡西区本城にある。子どもをもつ共働き家庭、あるいは単身家庭の親が安心して働ける条件を守るため、また子どもたちが正しくすこやかに成長してほしいという父母の願いにより、昭和50年(1975)4月に開設され、昭和52年(1977)4月に市から正式に認可された。当初は保育所からの受け継ぎ学童9人でスタートした保育も、現在では委託通算児童総数は、約800名になろうとしている。指導員である橋口季代子先生は、発足時から今日まで23年間携わってこられ、本城学童保育クラブの歴史イコール橋口先生の歴史であると言っても過言ではない。児童は、小学校低学年を中心に小学校中学年、幼稚園年長組男児、三才男児を含み、全体で約80名である。しかし、高学年になると下校時刻が遅くなるためや、習い事、一人でやっていけるといった理由から学童保育へ来る回数の減る子どももいる。保育時間は、下校後より5時頃までとなっているが、親の都合や習い事などによりそれ以前・以降の場合もあり、保育時間についての制限は特にない。また、春・夏・冬休みなどの長期休みは一日保育となっている。休日は日・祝・祭日、第二・第四土曜日、お盆休み、年末年始であり、

それ以降は通年開設されている。親の労働日・労働条件により、今後は、第一・第三土曜日の開設も検討されているという。専属の指導員は二名で、アルバイトのお手伝いさん三名を含め計五名で子どもの世話をを行っている。子どもの読書や宿題を見てやったり、おやつを作ってやったり、遊んだりすることが日常の活動の中心となっており、長期休みでは野外キャンプやゲーム大会、他の学童クラブとの交流を行ったり地域の子ども会の行事や敬老会などに参加するなど、地域社会で活動も積極的に行っている。

子どもたちの一日は、下校後「ただいまー」と帰ってきてから宿題を済ませることから始まる。宿題が無い場合や済ませた子どもは早速遊びに入る。学童クラブは団地のほぼ中心にある集会所内に設置されており、目の前には公園があり、その隣には野球、サッカー、ドッジボールができるほどの大きな広場もある。子どもたちは、そこで野球や鬼ごっこ、一輪車など様々な遊びをしている。

また、三時半のおやつ時間では、歌をうたい音楽を聴くことで遊びで興奮した心身を落ち着かせるのである。おやつについては、台所があるためバラエティに富んだ温かいおやつも登場する。例えば、ふかし芋、焼きそば、炊き込みごはん、食パンに砂糖をかけ焼いたものなどである。子どもたちのおやつは市販のものだけでなく、手作りのおやつや、お金を持って好きなものを買

いに行くといった工夫を凝らしたものなど、印象に残るような時間にするよう心掛けている。

四時頃、おやつが終わると、先生が何か話をするかも知れば、すぐに遊びに入ることもある。この時間の遊びは全員が外に出なければならない。また、指導員も子どもと共に遊ぶ時間である。

そして5時頃になると帰り支度を整える。そのうち親が迎えに来たり、子ども同士で帰って行き、子どもの学童クラブでの一日は終わる。

このように一日の流れの中で遊びを中心とした生活が送られており、遊び以外の時間においても子どもたちは常に誰かと関わりを持っている。このような状況は帰宅してからの子どもたちの生活の中では形成されず、学級においては同年齢集団との関わりはあるものの、異年齢集団を体験することは無い。しかし、学童保育では当然のように異年齢集団が存在し、相互に影響しあっている。かつて、どこの地域にも存在していた異年齢集団が学童保育というかたちで存在し続けており、子ども社会におけるある種の教育機能をはたしているのである。

第2章 本城学童保育クラブにおける異年齢集団調査

以上のような異年齢集団から、本城学童保育クラブで、小学校一年生から六年生

の男女を対象とし、観察データと、インタビューを中心に異年齢集団の実態に関する調査を行った。以下、第2章・第3章では、その調査結果をもとにこれから本城学童保育クラブの子どもたちとその異年齢集団の傾向を一つの参考にしながら、論を進めていきたいと思う。

< 調査の目的 >

本城学童保育クラブの子どもたちが、どういった集団形成をしているのか、また、その集団構成にはたらく要因を、観察データとインタビューをもとに分析する。これによって、異年齢集団の形成、男女別集団形成、集団形成と地域の関連性について、また、集団形成にはたらく要因について、学童保育という環境を基底に置き、明らかにしたい。

< 調査の概要 >

調査地は、北九州市八幡西区本城学童保育クラブ、市営団地の第二集会所内とする。対象児童は三才男児・幼稚園年長組男児各一名を含む小学校一年生から六年生までとする。調査は、1998年9月21日から10月28日に渡り、指導員のお手伝いをしながら行った。

調査方法は、ランダムサンプリング法を用い、ある一日の任意の時間に形成されている子どもたちのグループをすべて記録した。観察回数は、11日間に渡って行い一日に2・3回の割合でカウントした(詳細は表

に示した)。また、指導員や父母の方にはその都度インタビューを行い、子どもの日常生活を観察した。

その結果、ランダムサンプリング法で得られたデータサンプル数は、150であった。サンプル数における、学年別・男女別人数はつぎのとおりである。尚、集団の人数1の場合は次の2-1のみ起用する。

その他、観察とインタビューで得られたデータについては、第3章で事例として上げる。

2-1 集団形成における男女別人数と集団の大きさ

この調査の結果から読み取れることは、まず表Aからも明らかなように集団を形成する際に男女分離型傾向が圧倒的に多いということである。

男子0人に対しての女子の構成人数のと、女子0人に対しての男子の構成人数の合計を男女分離型とし、それ以外の構成人数の合計を男女混合型とする。その結果、「男女分離型115」、「男女混合型25」であった。また、グループの構成人数をみると、男女分離型では、男女ともに「2~3人」が最も多く、「1人-10(男4,女6)」、「2人 28(男16,女12)」、「3人 30(男15,女15)」となり、次いで「4人 19(男11,女8)」、「5人 15(男9,女6)」、「6人 10(男4,女6)」、「7人 5(男子のみ)」であった。「8~15人」においては、男子の方が女子より

も集団の大きさは若干大きいものの、グループの大きさとしては比較的形不成されにくいことがわかる。男女別の集団の大きさは女子よりも男子の方が大きい、それほど差は見られなかった。男女混合型では、「男女各1人 5」、「男2人、女1人 5」、「男1人、女5人 3」、「男女各2人、男3人・女1人 各2」となり、その他の場合は各1であった。男女分離型と男女混合型の構成人数の合計からも、1人 10、2人 33、3人 36、4人 23、5人 17、6人 14、7人 5、8人以上の場合は1人~3人となり、やはり、2人~3人が多く、ついで4人~6人の場合が多いことが分かる。さらに、両集団の構成人数の大きさは、男女分離型平均4.13(男4.27,女4)男女混合型平均4.6で、男女混合型が多少多いものの、ほぼ同じぐらいであることが分かった。

観察では、女子よりも男子の方が集団の大きさは大きいと感じられたが、それほど差は見られなかった。何故、観察では、男子の集団は大きく見え、女子の集団は小さく見えたのだろうか。おそらく、男子の場合を考えると、野球をしている場面やプロレスをしているところへ徐々にその他の児童が集まりはじめ、気が付くと大きな集団へ発達しているといった光景が印象的であったためであると考えられる。逆に女子では、2~5人の集団がほぼ平均的に点在していることが多いという印象が強かったためであると予想される。

2-2 異年齢集団と同年齢集団、性別・学年による違い

次に、同年齢集団よりも異年齢集団の方が多いことである。表Bは、表1 男女分離型の異年齢数と男女混合型の異年齢数の各合計と平均、同年齢・異年齢集団別のサンプル数を示している。表Bから、平均の合計のうち、同年齢集団52(37.1%)、異年齢集団88(62.9%)で、約1.7倍の割合で異年齢集団が多いことがわかった。

また、表C-男女分離型異年齢数の男女比較では、「1学年 男14,女32」、「2学年 男27,女12」、「3学年 男11,女6」、「4学年 男11,女1」、「5学年 男1,女0」で、2学年以上の場合男子の方が多くなっている。同年齢(1学年)集団では、男21.9%、女62.7%、異年齢集団では男78.1%、女37.3%となり、男子は異年齢集団が多く、女子は同年齢集団が多いことがわかる。性別によって、集団形成の傾向に違いが表れることが分かった。このことから、2-1の男女別の集団の大きさと、性別による集団形成の傾向には何らかの関係があると思われる。この関係については、後の第4章(考察)で述べる。

さらに、表3はサンプル1を1グループとした場合の各グループの学年別人数とそのメンバーの地域を示したものである。表3をもとに、各グループの最小学年をめや

すに、高学年から順に整理し、異年齢(異学年)の数と平均を表した(表4)。その結果、四年生最小の場合1.11、三年生最小の場合1、二年生最小の場合1.78、一年生最小の場合2.07、幼稚園最小の場合3、三才児最小の場合3.11となった。つまり、学年が下がるに連れ、関わる異年齢層が増加し、逆に学年の上昇に伴って、同年齢(同学年)同士で集まる傾向が強いことが分かった。

2-3 集団形成と地域性

さらに、今回の調査で得られたサンプルから、児童一人に対し、誰がどの程度関わったのか、その頻度を集計した(表5参照)。また、表5から、子どもの人間関係を表した。子どもの人間関係から日常の観察と、子どもの住所をもとに近隣又は方角によってグループ分けをしたものを用い、集団形成と地域性の関連について調べた。

すでに、第2章2-1の結果からも明らかであるが、男女分離型傾向が表れた。特に、同学年同士の男女の関わり頻度を見るとその傾向は明確である。以下、男女学年別傾向を述べ、その比較をしていく。

男子編

一年生・二年生はほぼ全員が両学年に関わりを持ち、その頻度は三年生以上との関わりに比べると高くなっている。特に、一年生の1、5、6、7、9、10は相互に頻度が高く、二年生の26、28との関わ

りも多くなっている。また、五年生の64、65との関わりがあり、四年生の58が学童クラブへ来た時には決まって関わりを持っている。

三年生は、同学年同士・二年生との関わりが高くなっている。四年生から六年生になると、人数の減少も考えられるが、同学年同士というよりも、幅広い関わりであることがわかる。これは、男子全員に見られる傾向である。

女子編

同学年同士の関わり頻度を見ると、各学年において、ほぼ全員が関わりを持っている。特に、二年生の同学年頻度は、他学年に比べると、非常に高くなっており、学年同士のつながりが強いと思われる。しかし、一年生25は同学年よりも二年生との関わりが高くなっており、三年生の50、51も二年生との関わりが多くなっている。

男女を比較する

男女を比較すると以下のような傾向があると考えられる。

男子は、一年生と二年生のつながりが強いということを中心に、その他の学年との関わりもあり、幅が広いといえる。一方、女子は他学年同士の関わりはあるものの、その頻度は、男子の場合と比べると、少ない。

つまり、男子は異年齢集団を、女子は同年齢集団を形成しやすいと思われる。

さらに、学年が上がるにつれ、男女分離型傾向が強まっていると考えられる。

以上のことをふまえ、子どもたちの人間関係を、頻度の強さと、日常の会話、観察から分析すると、特に、頻度の高い子ども同士では、近隣という要因から帰宅の際に一緒になったり、帰宅後すぐに集まってきて遊んでいることなどから、地域性が関係しているといえる。しかし、その他の場合でも、頻度は少ないが関わりを持っており、集団形成において地域の力が著しく働いているとはいえない。

つまり、頻度が高く、仲のよい子ども同士には地域性は関係しているが、むしろ、多様な地域から集まり、様々な地域の子どもたちと遊ぶ学童保育では、地域性という要因は影響していない。

そこで、第3章では、集団形成において地域性以外の要因について分析する。

第3章 集団形成と人間関係、学童保育の事例から見えてくること

第3章では、先述の観察に加え、子どもたちと実際に関わっていく中での発言や行動、インタビューなどから、集団形成や人間関係にはたらくその他の要因について分析した。ここで、「グループ」について説明すると、『グループとは似通った点によって分けた人(物)の集まりであり、その人と行動を共にする集団・仲間である』(新明解

国語辞典第四版；金田一京助より引用）とあるように、まず、グループ作り（集団形成）には、似通った点を持つ者という要因が考えられる。

その他については事例を交えながらその要因について考えていく。尚、事例の最後に人間関係における力関係を示した。

事例から

1) 22等一年生4、5人で高鬼遊びをしていたところ、近くで他の遊びをしていた15等3、4人が加わった。突然、高鬼をしていた22が怒りだしたため、「どうしたの。」と聞くと、「だって15ちゃんたち嫌いやもん。」と言って、22は高鬼をやめた。

また、22と仲が良い二人組12、23（12と23は同地域）が滑り台で遊んでいたところへ、15がやって来た。15は12が後ろ向きにすべっていたので「そんなすべり方したら危ないけやめりー。」と言う。12は「何でそんなん言うん。15ちゃんすぐそんなん言うけすかん。」と不愉快そうな口調で返した。15は少しだまった後、その場を去った。

その他の場合に、15が12、23に接している場面を見ても12、23は特に何も言わないが表情を見ると「嫌だ」と言っているようである。つまり、15が一方向的に働きかけていることがわかる。また、15と12、23、その他数人で遊んでいたこともあるが、遊ぶまでの手続きを見ている

と、15が12、23を無理にでも何とか説得して加えた様子であった。言い換えれば、強制的傾向があると言える。

2) 一年生21は、はじめの頃は色々な友達とも遊ぶ頻度も多かったようだが、日を追うごとにその数が少しずつ減ってきている。21は喧嘩をしても「私はわるくない。」と言い張り、それによって誰とも口を聴かなくなることがしばしば続いたことが原因となっている。そのため、一人であることも多い。これには、21の自己中心的という要因が考えられる。

3)ある三人グループ33・36(二年生)、50(三年生)があり、特に、36、50の二人はいつも一緒である。いつものように二人(36・50)で下校してきた。33は他の友だちと帰って来て、二人の所へ行き隣で宿題を始めた。あまり会話もなくそこにとりあえずいるといった状況である。三人が宿題をしていると、36が「わからん、教えてよー」と言うので、ヒントを与えてから、すぐにその場を立ち去った。すると、33がやって来て「36が来てって」と伝えに来たため、思わず33に「自分でおいでって伝えて」と言うと、その後すぐに36が来たのである。

ここで、三人の力関係が成り立つ。36を中心としたグループではあるが、50は36に「しー(しなさい)」と言われても自分自身が嫌だと思ったら、行動に移さ

ない。33は36・50と居ることが多いが、自分からあまり話そうとせず何か言われたら頷くといった状態であり、そのため、言われたことを何でもしてしまう。36と33の力関係は支配的であると考えられる。

4)いつもは、ほとんどが一・二年生で、時々三・四・五・六年生が加わる野球のグループがある。一・二年生みのみのゲームでは二年生が指示を出す。特に、四・五・六年生は野球が上手という理由から、突然の参加でも、一・二年生は快く歓迎する。そして、「**君が入るって。じゃあ、僕**君と同じチームがいい。」と上級生と同じグループになろうとする。そこで、今度は上級生が指示を出しその他の学年の子どもたちは彼等に従う。二年生の支配力は自然と上級生へと移っていき、上級生を中心に、ゲームは進行していく。そこへ、野球を知らない近所の子どもが「参加したい」と言うので、ルールを教えながら一緒になって走っている光景も見られた。

5)五時以降、子どもたちが減ると、一年生の女子三人がゴム飛びをはじめた。そこへ、四年生の男子二人が「俺もできるよ。そんな簡単やん」とやって来て参加した。今度は五年生の男子が「何しよん」と加わり、部屋全体を使って始めると、その周囲の四年生の女子や三年生の男子も加わり、大勢で遊び始めた。

6)部屋の中で『かごめ、かごめ』をしている四人のグループがある。メンバーは一年生の女子三人と一・二年生男子である。鬼は誰がなるのかと言うと、「僕やる」「私やる」となってしまう、結局女子の一人が「そんなんやったらやめる」と言うので、二年生男子は「俺、鬼一番最後でいい」ということから、鬼は順番ですするというルールのもと再開した。そこへ、五年生の男子が「俺も入れて」と参加した。五時以降ということもあり、帰宅する子どもが次々と抜け、最後には三人で遊んでいた。

7)一年生の女子22と幼稚園男児(帰るのが遅い)は皆が帰り始めると、ピカチュウごっこを始める。また、最後までいる私に「遊ぼう。」とやって来る。22の父親にインタビューしたところ、「五時以降が一番長く遊べる人と遊ぶらしいよ」とのことだった。

8)その他にも、近くにいる誰とでも関わる子どもたちは、比較的特定のグループには属さないという傾向が見られた。

また、指導員の方にインタビューしたところ、「 はおっきい兄ちゃんたち(年が離れた)がおるけ、本当は活発な遊びが好きなんよ。でも、 たちは女の子遊びが好きやけね」ということから、異性のきょうだいの影響も考えられる。

以上のような事例から、グループ構成過

程における要因としてリーダー的、尊敬する存在、支配的などの力関係によるもの、「一番長く遊べる人」などの子ども自身の様々な基準、きょうだい（性別・学年）の影響又は環境などの要因が考えられる。

第4章 分析・考察

地域社会の共同性の崩壊が進行し、新たな再編にむけての模索がつづいている今日、

子ども社会 子どもの領分 と言われるような自治的な子どもの中間集団が自然に生まれるという時代ではなくなっている。「ガキ大将」を中心に異年齢の地域子ども集団が自然発生的に存在していたのは一世代前のことで、いまや都市でも農村でも、子どもの少子化・管理化が進んでいるのが実態である。そこで、今日、大人の側からの意識的な働きかけが、子ども会・青少年団体などを通して行われている。『学童保育』もまさにその働きかけの一つとして考えられる。小学校に入ると子どもの生活は、それまでとは比較にならないほど広がる。しかし今では、子どもたちの自由な時間は短く、地域に自由に遊べる空間が減少し、また、少子化などから、子どもたちの友達関係は、地域の異年齢の集団のなかでつくられるよりは、多くがクラスのなかの友達であり、遊ぶときは少数であることが多くなっている。

このような、子どもたちの友達関係の変化の中で、学童保育の存在はある意味で異質なものとしてとらえることができる。な

ぜならば、異年齢集団という大ききょうだいのような環境を凝縮した場所だからである。今回のテーマである『地域の学年を越えた縦関係の実態～学童保育における異年齢集団の存在～』では、実際に学童保育では異年齢集団はできているのか、又、それがどのように形成され、どのような傾向（性質）を持っているのかを調査した。

まず、集団を構成する上での男女の人数について調べた。ここでは、集団を構成する際に男女が分離してしまう傾向を持っていた。集団の大きさは普段は二人～三人が多く、次いで四人～六人であった。特に、自然発生的な大きい集団は、野球やドッチボールなどの遊びの場合で、その他では、マラソンをしたり、公園の掃除、大人数で作業をする時など、先生の指示によって集団形成が成されている。また、集団の大きさの平均は、男女分離型よりも男女混合型の方が多少大きいですが、ほとんど差は見られなかった。

次に、異年齢集団がどの程度の割合で存在しているのかを調べた。すると、明らかに学年を越えた集団である場合が多く、同年齢集団の約1.7倍の割合で多いことがわかった。また、異年齢集団の男女構成人数を調べたところ、男女分離型が男女混合型の約3.7倍であった（表D）。同年齢集団の男女構成を見ても、やはり男女分離型が圧倒的に多い（表E）。つまり、異年齢集団と同年齢集団の両方に男女分離型傾向が強いと言える。さらに、両集団の男女の比

率を調べた。異年齢集団では男子の集団が、女子の集団より約2倍多く、同年齢集団では、男子よりも女子の方が2,9倍多いことが分かった。

2-1では、女子よりも男子のほうが集団は大きいと感じた。その理由に印象の違いを上げた。しかし、同年齢よりも異年齢が多い学童保育において、異年齢集団で遊ぶことの多い男子が大きい集団である、といった印象を受けたのは、むしろ、さまざまな子どもたちと関わっていたためであると思われる。

また、誰が誰とどの程度関わったのかという角度から、関わった回数が高い者ほど仲が良いとして子どもたちの人間関係を調べた。一人が関わった回数からも男子は女子と、女子は男子と関わった数は一部を除いては少なく、やはり男女分離型であった。

次に、2-1・2-2・2-3で得られた男女分離型の傾向を分析した。その結果、男子は全体的に、男女分離傾向があり、女子は特に二年生以上にその傾向が表われている。また、学年を追うごとに分離型傾向が強くなっていることがわかった。これは、低学年の関わる異年齢層の広がりや、学年の上昇によって同学年同士の関わりが高くなる傾向にあることに関係していると考えられる。特に、中学年頃は発達面において様々な変化が表れる時期であることにも関係していると考えられる。

さらに、集団をつくる際にはたらく力として、観察データによる子どもとの人間関係

から地域性の有無について分析した。特に頻度の高い子ども同士の場合には地域性も関係すると考えられる。しかし、学童保育を一集団又は大ききょうだいと考えると、むしろ、学童保育の中での集団形成には地域性という要因は大きなウエイトを占めていないと考えられる。しかし、家が少し遠い子どもたちは、都合によって家の者が早く迎えに来たり、遅く迎えに来たりするため、集団や数人の友達同士で帰ることがなく、子ども同士の時間が減少してしまう。そのような子どもは、比較的、集団や仲間から少し外れた存在となっていることが、観察を通して見えてくる。

第3章では、地域性以外の集団にはたらく力について分析した。その要因は、リーダー的、尊敬する存在、支配的などの力関係によるもの、子ども自身の様々な基準、きょうだい(性別・学年)の影響又は環境、遊びの内容、などの要因が関係していると考えられる。事例8のインタビューからは、学童クラブにおけるグループ作りは、学校でのグループ作りには何らかの力が働いていると思われる。また、事例5、6、7を前提に考えると、男女混合型の場合は屋外ではなく、部屋の中である場合が多く、子どもたちが帰宅した五時以降に多く見られていることが分かる。逆に、屋外において男女分離型傾向が多くみられた。

つまり、集団形成において、子ども同士の距離や限られた空間、子どもの数の影響も一つの要因として考えられる。

以上の結果より、学童保育を通して学年を越えた関わりあいがあることが明らかになった。しかし、男女混合型というよりは、むしろ、男女分離型という傾向を持っていた。また、異年齢集団において男子の集団が多く、女子の集団は予想以上に少なく、同年齢集団を形成し易い傾向にあった。

さらに、低学年は関わる異年齢層が広くなり、逆に、学年の上昇に伴いその傾向が低くなり、同学年同士のつながりが強まっている。

つまり、集団形成は男女別に特徴があり、その要因として、遊びの違い、遊ぶ範囲(野球)の違い、力による要因などがある。特に、三年生以上は発達面においてさまざまな変化が生じるため、それが同年齢集団の集合という形で表れたのかもしれない。また、二年生以下の児童を含む異年齢集団は相互関係が上手く保たれており、学年が上がるに連れ低学年を媒介とした集団形成が成されていると考えられる。

これらの要因は子ども社会に限らず、大人社会においても働いている。この点から観ると、大人も子どもも集団や仲間を作る際に、同じような力を利用していることになる。唯一違うところがあるとするならば、仕事と遊びの付き合いの違いであり、仕事では多少嫌いな人とでも付き合いをいこうとするが、遊びではそういうわけにはいかない。そう考えると、子ども社会は遊びをメインとするだけに、鮮やかに人間模様が

浮かび上がってくる。

結論

今回の調査により、地域から姿を消したと言われていた異年齢集団が、学童保育というかたちで存在していることが確認できた。

このように、共働き・単身家庭の親が中心になってつくられた学童保育は、異年齢集団の再興とともに、異年齢集団の新しい在り方として捉えることができる。

今後、益々進行して行くと予想される核家族化、少子化、環境の変化の中、きょうだいが飛躍的に増加することは望めない。しかし、同学年同士の遊びが増加し、地域から異年齢集団が消えつつある危機的な状況である一方で、ようやく異年齢集団の存在・機能の重要性が見直され始めていることは確かである。

このように、様々な面で影響を及ぼしている急速な社会変化は、地域子どもたちの異年齢集団の喪失として現れた。また、社会の影響が親から子へ伝わり、それが子ども人間関係においても影響していると感じられた。

今回の調査では、主に学童保育の集団形成に焦点を当てたが、学童保育と学校(学童保育には通っていない子ども)での異年齢に対する意識の違いについて、今後の研究に期待する。